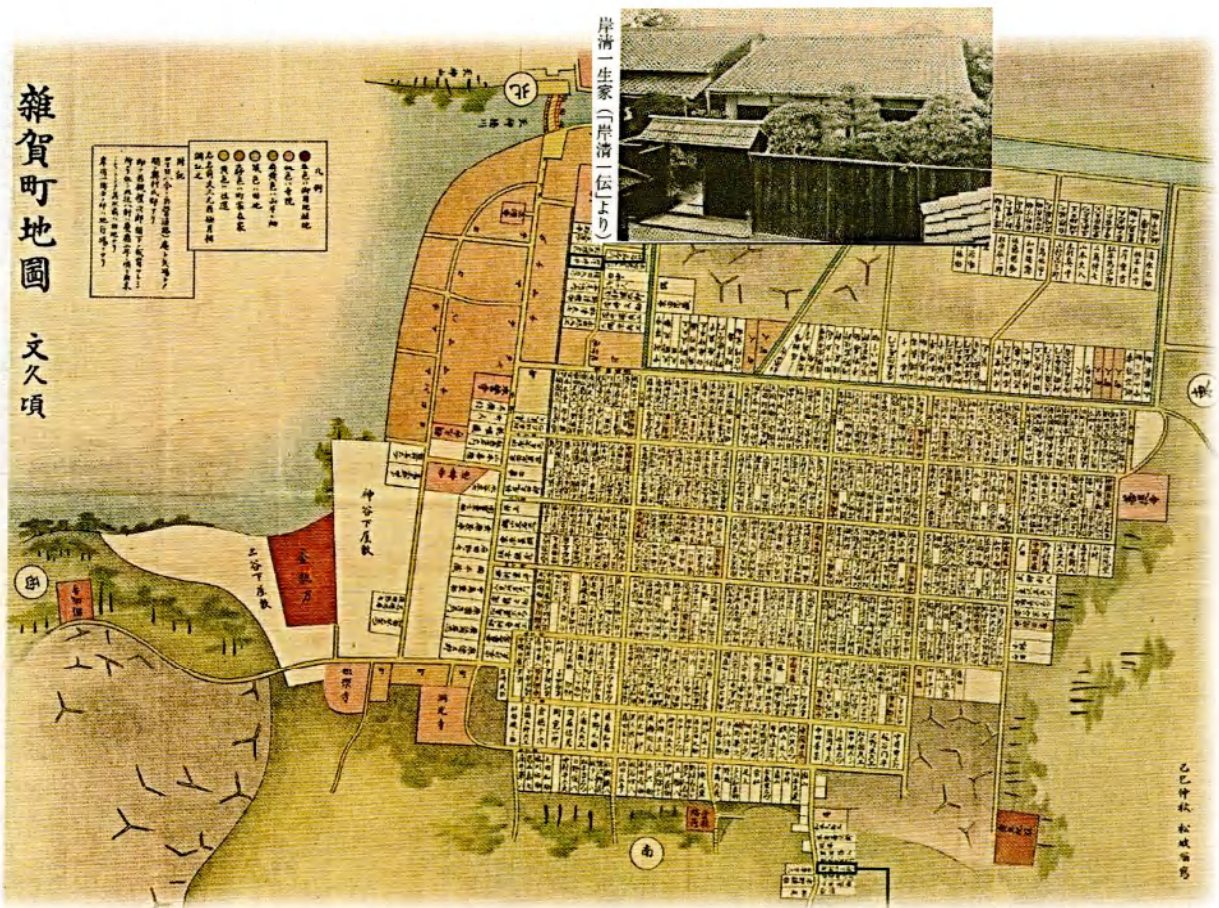




スポーツと郷土を愛した男 岸 清 一



(島根大学附属図書館蔵)

津田街道未来塾 若槻喜保

スポーツと郷土を愛した男 岸 清一

津田街道 未来塾 若槻 喜保

I. はじめに

II. 岸清一の足跡を追って

1. 生い立ち 東京遊学へ

- ・慶應3年7月4日 松江市雑賀町地行場で下級武士（司獄官）岸 伴平の次男として生まれる。
※この年にえいじゃないかが起こり、12月には大政奉還の大号令が発せられ、翌年明治の世となる。
※夏目漱石、正岡子規、幸田露伴、尾崎紅葉 etc が生まれた成り年。
坪内祐三著「慶應3年生まれの7人の旋毛曲がり」（2001刊）

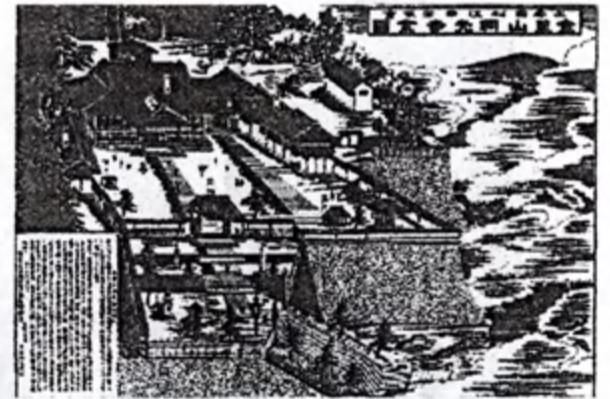
- ・雑賀町は、橋南の下級武士の居住区・・・「雑賀魂」
澤野修輔 梅健次郎兄弟 山口鋭之助・・・勉学を積み、上京し、成功していた

・当時の教育環境

藩校「修道館」（上級武士が通う） 下級武士、庶民は、塾・寺子屋に通う。松江に54あった雑賀町には、4つの塾、12の寺子屋があった。他地域より多い

培塾（澤野修輔） 共進学舎（尾原総八） 博審学舎（永田穂積） 普通学舎（渡部寛一郎）

- ・岸清一は、明治6年の学制発布と同時にできた洞光寺（右図）の庫裏で開校した雑賀小学校に入学した。
学年は異なるが若槻禮次郎、西田千太郎等も入学した。



松江中学校第二科生（前列右から2人目が岸清一、3人目が若槻禮次郎）

若槻禮次郎、岸清一を「臥龍鳳雛」と雑賀小学校5代校長栗田幹氏と例えた。

臥龍…今は伏しているが起き上がれば大成する【若槻】
鳳雛…将来大きく羽ばたく優れた強い人【岸】

- ・小学校を首席で通した岸は、明治12年教師たちの推挙もあり松江中学校（現松江北高）へ進学を決め、入学試験に

合格し、殆どの科目を英書の教科書とした第二科に進んだ。

- ・明治16年3月、17歳の時に、首席を通して中学校を卒業した。
- ・第4回の卒業生であったが、入学当初50名であった生徒が中途退学病死等によって、卒業したのは、18名でそれまでの最も多い卒業生であった。

・岸は中学校在学当時、上京して、勉学に励み、活躍している先輩達を見、聞きした。岸は青雲の志を抱き、上京への決意を新たにした。家族、特に父伴平の理解を得て、家禄奉還金 300 円等、岸家の全財産を懐に、明治十六年初夏、上京する。父伴平が長州征伐で敗走しながらも持ち帰り、家宝にしていた兜をも金に換え、上京資金にした逸話は有名である。

2. 東京遊学時代 大学予備門 (1 年半)・東京大学法学科 (4 年間)

※明治 19 年より帝国大学法学部、30 年より東京帝国大学法学科と改称

※東京大学の歴史は、明治元年に官立洋学研究・教育機関として創立された「東京開成学校」と東京医学校が合併し、明治 10 年に法・理・文・医学部を備える東京大学となった。元は文久 3 年、旧幕府直轄の「開成所」から発展した。

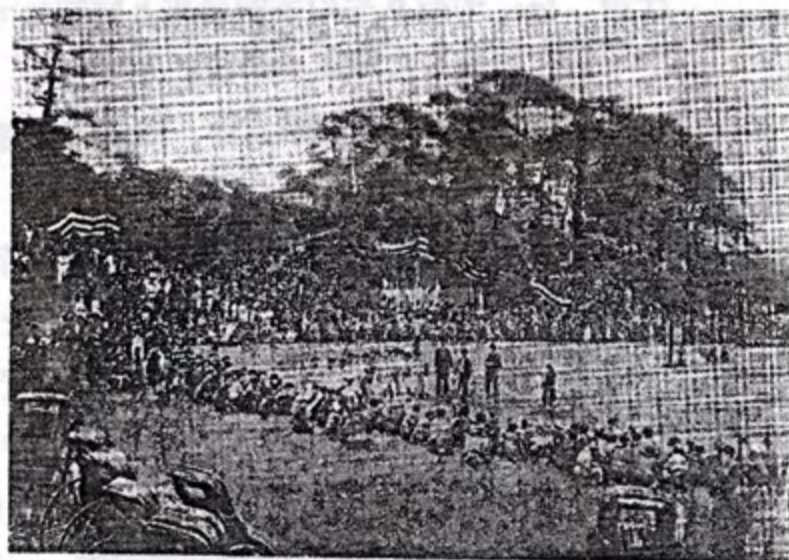
- ・明治 16 年初夏に松江を後にし、半年後の明治 17 年 1 月に東京大学予備門 (後の旧制第一高等学校) の 2 年生補欠試験に臨んだ。受験生 122 名中合格者はただ一人最年少の岸。天下の秀才を集めて行われた試験での合格は「予備門に岸清一あり」と一躍注目を集めた。
- ・明治 16 年 10 月、岸、志立鉄次郎等 (後に日本興業銀行総裁) 8 名で「出雲学生会」を立ち上げる。
- ・明治 18 年 9 月、東京大学法学科に入学。
大学在学中は、学業はトップクラスを競い、次席で卒業した。在学中から弁護士として活動することを目指し、増島六一郎弁護士の事務所に通い実務を学ぶほど法曹界への志が強かった。
- ・岸は、学業だけではなく、余暇も当時流行していたトランプ、玉突きに熱中し、酒も大いに飲んだと郷里を同じくする同級生志立鉄次郎は語っている。

・スポーツとの出会い 予備門の英語教師のフレデリック・ウイリアム・ストレンジが、学生たちに教えていた陸上競技、漕艇の魅力に岸は取りつかれ、ストレンジの直弟子として活動するようになった。



明治22年4月 帝国大学ボートレースにおいて法科大学優勝 (後列左が岸清一)

・明治 16 年、東京大学で初めて競争の要素を取り入れた運動会が開かれた。岸も参加し、卒業後は指導・運営を行い、全国に広め「運動会の産みの親」と言われている。



わが国陸上競技の発展に貢献した東京大学運動会

・ストレンジから英国のテムズ河のオックスフォード大学とケンブリッジ大学のボートレースが伝えられ、岸は、明治 20 年大学内の学部対抗ボートレースを隅田川で行った。

・卒業後も漕艇に尽くし、大正 9 年に日本漕艇協会を創立し初代会長となった。

3. 一人一業主義 弁護士で大成

- ・「人に頼らず、媚びず、実力で生きたい」 培塾・澤野修輔の薫陶—自主・独立の精神
- ・明治22年7月、東大を次席卒業した岸は、代言人（「三百代言」と卑称されていた「八百の嘘でごまかす三百屋」）の免許を5日後に取り、東京都京橋区加賀町（今の西銀座6丁目）に事務所を開いた。

※ 明治23年、近代的な「弁護士法」が制定され、江戸時代から使われていた代言人に代わって弁護士と言う名称が使われるようになった。



明治22年 弁護士開業当時、母堂と共に

明治30年、弱冠31歳で、それまで貯めていた預金1万円を投じてアメリカ、イギリスへ法律、特許事務、外資導入等の研究視察に行く。翌年4月に1年2カ月の先進国での研修から帰朝し、洋行帰りの国際弁護士として注目された。

・明治32年、京都の紙巻煙草製造業を営む村井兄弟商会に同業のアメリカの会社から外資導入を図り、大会社と成した。

・大阪瓦斯会社では外資導入交渉を成功させ、大阪市との道路使用権問題を解決し、望まれて取締役となった。外資導入の先駆者と同時に完成者と呼ばれた。

・弁護士として盛名が高まるにつれて法相の声がかかったり、官界からの誘いがきたりすると、

岸は、「弁護士は一生の仕事であり、片手間にすべき仕事ではない」とあっさり断った。

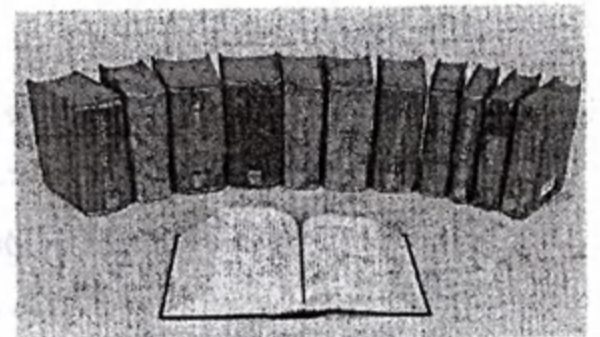
田中寛之丞

・久成寺移転訴訟（白濁大火：昭和2年 昭和3年～7年5年間）

・大正12年の関東大震災の

折、岸の機転で被害を免れた訴訟資料は、『岸清一訴訟記録集』12巻（右図）としてまとめられ、岸の法曹界での業績と共に、明治・大正・昭和の貴重な法律発達史、社会史でもある。

- ・ 弁護士仲間で岸事務所を訪れ、後法務大臣になった原嘉道弁護士は追悼録の中で 「岸は、非常に強い性格の持ち主。弁護士としては最適である。しかも法廷に立つ以前の準備が実に周到で相手が挑戦してくればいつでも応ずるだけの用意を怠らない人だった。そして責任感の旺盛な人だった。」 松江市西原町の岸法律事務所で働いていた田中保氏は「人情味が熱い、思いやりの深い、細かいところに気の付く人で仕事を離れると父親のようだった」と綴っていた。

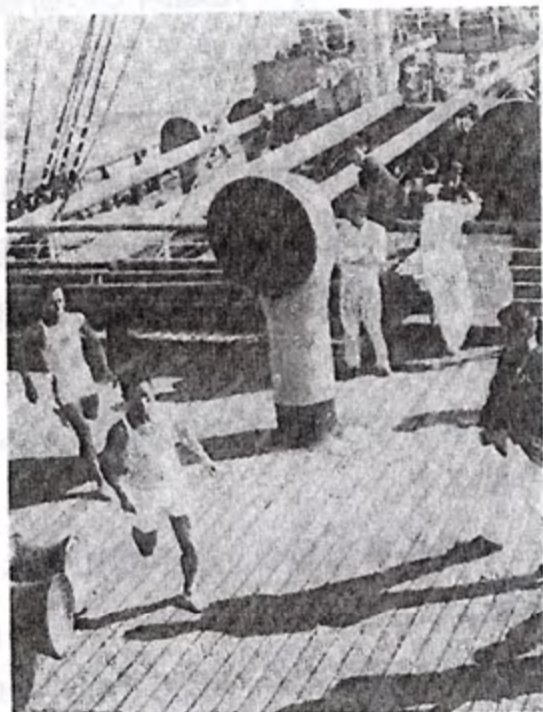


4. 日本の近代スポーツ ・オリンピックの父として

- ・岸が初めてオリンピックを視察したのは、明治41年のロンドン大会の時である。格差を感じた。
- ・明治42年春、フランス駐日大使ゼラルールが、当時の東京高等師範学校長で講道館長である嘉納治五郎に「ストックホルムで開かれる第5回オリンピックに参加してほしい」と要請したことによって日本のオリンピック参加の扉が叩かれた。
- ・嘉納は勧誘を承諾し、同年秋、日本最初の国際オリンピック委員となった。続いて、明治44年7月

「大日本体育協会」が創立され嘉納が初代会長となった。

- ・ストックホルム大会からの参加状況等は別紙資料に記すが、特に、大正九年のアントワープ大会に参加して、競技への理解、練習方法等の遅れを強く感じ、日本スポーツ界を覚醒させる大会となった。
- ・大正10年岸は、大日本体育協会の第二代会長となった。大日本体育協会は、発足以来2回のオリンピック大会に参加してきたが、国からの財政的支援はなく、組織としても十分なものではなかった。発足当初から協会に協力し、裏方から支えてきた岸がいよいよ正念場を迎えた。
- ・岸が会長に就任して取り組んだのは、協会の財政難の解消と内部組織の改造である。
- ・国のオリンピックへの理解、岸・体協の努力によって大正13年のパリ大会から国庫より選手派遣費用補助が得られるようになった。また、昭和2年三井・三菱・岸が各3万円を寄付し、基金として協会の財団法人化をなした。内部組織の改革では、パリ大会前に13校問題が起こり、派遣選手の選考を本部中心主義から、陸上、水泳等の各連盟が選考し、協会はそれを総括するものとした。



パリ大会のIOC総会で日本の陸上、水泳連盟がそれぞれ国際連盟に加入した。岸も国際オリンピック委員に任命された。

・昭和7年の第10回オリンピックはロサンゼルス大会であった。岸は、アメリカに次ぐ200名の選手団を2陣に分け送った。第1陣の岸が私財を投じて日本郵船の「龍田丸」であった。プールも備えた豪華客船で海路16日間は選手たちの練習場と化した。日本は陸上、水泳、馬術等9競技に出場した。津田精一郎はマラソン第5位、吉岡隆徳は百メートルで第6位に入賞する好成績であった。特に競泳陣は男子6種目中、五種目で優勝し世界を驚かせた。

- ・IOC委員の中でも「ドクトル・キシ」と呼ばれるほど国際的に認められてきた岸は、大会の一夜、大会組織委員のメンバーの招待宴を開き、席上「大会は欧米のみにか限ることなく、五大州全部で開催すべきである。日本はアジアで唯一の開催資格を持っている国である」と訴え、ロビー活動を展開していった。



- ・昭和11年ベルリンでのIOC委員会で昭和15年、東京でのオリンピック開催が決まった。
- ・昭和12年7月7日の盧溝橋事件を契機に泥沼の日中戦争へと突き進み、これまで築いてきた岸たちのオリンピック・ムーブメントの志は軍部の前にかき消され、昭和13年7月、東京オリンピックの開催返上が決定した。ここにアジア初のオリンピックは、幻の大会となった。

5. 強い郷土愛

・岸育英事業

大正6年、岸が帰省の際、松江中学校教諭山本庫次郎氏からの、小学校を優秀な成績で卒業しながら貧しいため進学できない生徒が多いという訴えを契機に大正8年、この岸育英事業を発足した。

殆どの奨学金制度は、貸費制であるが、岸育英事業は給費制であった。そこには岸一流の情味が含まれていた。「貸費を受けた側から言えば業成って後、これを返済すればそれで帳消しであるという考え方を青年に持ってほしくない。先輩に受けた恩は後輩にそれを返すべきである。他人から学資を受けてまで勉強する程のものなら、そうした心構えは当然、持っているはずだから、学費を与えた自分に返済する必要はない」と言うのである。「先輩に受けた恩は後輩に返していこう」である。

岸は恵まれぬ学生時代を送っていた明治19年、育英に熱心な旧藩主松平伯爵の貸費制度が始まり、岸、若槻、志立鉄次郎（後に日本興業銀行総裁）等五名と共に月額10円を支給されてやっと学業を続けられたという忘れられない経験を持っていた。この恩義を岸らしい形で世に還したのである。

この岸育英事業は岸の没後、令嗣偉一氏によって昭和十四年まで継承され、総受給者は546名を数える。その中には島根県選出の佐野広参議院議員や伊達副知事など多くの人材を生みだしている。

松平伯爵の貸費制度後、明治31年に出雲育英会が発足し、明治37年に出雲育英会寄宿舎を開所した。昭和2年春には在京の学生の生活監督指導、経済面を担う社団法人出雲育英塾が成立し、東京中野に寄宿舎を新築した。岸は、出雲育英会当初より委員となり、出雲育英塾に於いては理事長として塾の運営、塾生の監督指導を全面的に尽力された。

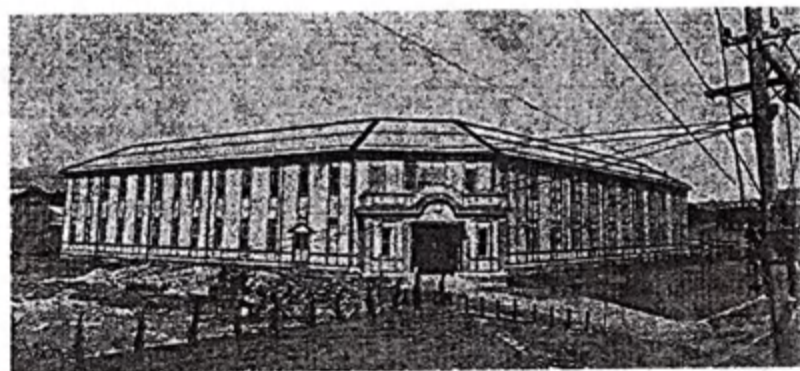
忘れてならないのが、東京に上京遊学した学生の会合「出雲学生会」の存在である。明治16年、外神田福田屋に於いて岸、志立等八名によって創立されて以来130有余年、現在も「東京出雲学生会」とし、6月に總會、12月に「義士会」を開き、在京の学生の情報交換、交流の場となっている。

岸は、帰松すると必ず賣豆紀神社への参拝し、母校雑賀小学校を訪問した。その際後輩たちへ立派な人物になるために真心を以って取り組みなさいと伝え、「日本一の人になりなさい。商人でも大工でも百姓でも何でもよい。日本一の人物になるように心掛けなさい」という言葉を残した。明治44年、児童奨励金として金300円を寄贈した。その寄贈金を基金として「岸法学博士奨学賞」を学年末に賞品と共に授与していた。

また、大正九年には体操器械費を、大正12年には創立50周年の記念事業にも寄与されている。明治16年に卒業した松江中学校にも明治44年に700円を後進の奨励費として提供し、漕艇部選手を熱く指導する岸であった。

郷土の文化スポーツ施設の充実への貢献

1、旧制松江高校（現島根大学）の誘致新設



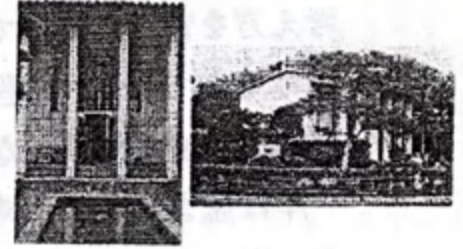
大正9年11月、旧制松江高等学校は創設されたが、それ以前に山陰へ旧制高等学校農林学校の設置が計画された。

松江市でも期成同盟を組織し猛運動を展開したが、鳥取出身の奥田文相の関係で鳥取市へ設置が決まった。松江市は、それならと・・・普通高校誘致へと切り替え、東京の岸に泣きついた。岸は、当時政友会総裁だ

った原敬氏に「もし、あなたが内閣を組織される時は、松江市へ第一に高校を設置してほしい」と要請した。大正7年9月原敬内閣が誕生し、高校増設問題が議題となり、大正9年11月、旧制松高は誕生した。このような経緯もあり岸は松高生に対する親近感は強く、帰松の度、同校を尋ねた。

2. 小泉八雲記念館創設への支援

明治37年、小泉八雲は松江をこよなく愛しながら東京で逝去した。ところが大正12年、その蔵書2,500冊が突然、富山高校へ寄贈された。松江から相談を受けた岸は直ちに小泉家と懇談、遺品等31点を譲り受けて、松江に送り、記念館建設に当たっては費用の半分を負担するなど、記念館誕生に尽力した。



昭和8年11月完成の小泉八雲記念館

3. 岸運動場建設

昭和13年春、松江市会議員山尾鶴吉氏が上京し、岸の長男岸偉一氏に「雑賀校は、運動場が貧弱な状態で橋南にも適当な運動場が欲しいというのが住民多年の要望である。それには、床几山公園付近が最適地である。」と直接要望した。偉一氏は、



昭和15年4月完工した運動場 昭和30年「松徳女学院」となった国民健康増進体位向上の上からも賛同され費用の全額2万円を寄付された。

昭和14年6月より小中学校、高校の生徒たちの勤労奉仕の協力で同年11月3日に盛大な完工式が挙げられた。幼児遊園地、低学年遊園地、陸上競技場、少年野球場、テニスコート、弓道場、相撲場、選手、一般の控室等を備えた立派なものであった。町内の運動会、野球大会などにも利用され市民にとっては貴重な運動場であった。

しかし、松江市発展のため昭和30年に姿を消し、現在県立美術館、宍道湖畔に「岸公園」として市民、観光客の憩いの場、「日本の夕日百選」にも選ばれ多くの人々を魅了する公園に姿を変え、多くの人々を楽しませている。

Ⅲ. 岸 清一の人間性をみつめて

1. 「至誠努力」の人

真心を以って努力する、「至誠努力」。少年期からの時代を切り取ってみても岸の志へ向かう姿勢はこの言葉につきる。東京大学までの学業については勿論、弁護士としての取り組み…郷土愛に燃えたいろいろな貢献も同じである。

昭和2年、帰松し雑賀小学校を来校した際、揮毫した書が今も雑賀小学校の玄関にかがけられているが、まさに言行一致、子ども達に与えるものも大きいことと考える。

至誠努力

2. 「自分は如何に生きるべきか」を追求し、行動した人

岸が偉業を成し遂げたのは「自分はいかに生きるべきか」という自主・自立の精神であり、幼少年期から松江中学校（現松江北高）の頃に育まれたと考える。

黒船来航と時を同じくして松江藩 12 代藩主に就任した松平定安、幕末期の外患の憂いに対する危機感の中で、洋学の導入や庶民教育（「百事は学問を以って基本」）、兵制改革など積極的に藩政改革を推し進めた。それを支える中に他藩から所望される程の儒学者雨森精翁、内村盧香がいた。



12 代松江藩主松平定安 雨森精翁 田町「養生塾」 内村盧香 中原町「相長舎」 澤野修輔 雑賀町「培塾」

両人を師とする澤野修輔は岸の幼少年期、また雑賀小学校長として、子ども達が自己のよさに気づき発揮し、師弟の信頼のなかで自立心を培っていく教育をしていった。内村盧香には、松江中学校時代、登校前の早朝に西茶町の「相長舎」まで毎朝通い教えを受けた。植民地化していくアジア、そのアジアの中の日本はいかに舵を取っていくのか…このような話題の中で、岸自身、如何に生きべきかが人生の課題と気づいていったと思われる。

3. 相手を思いやる想像力、実行力

東京大学在学中郷里からの仕送りの途絶えがちの中での旧藩主松平伯爵からの奨学金、下級藩士で小学校、中学校、大学と進ませてもらった父伴平、家族の理解、支援等は一心に努力している岸の心に宿り、岸弁護士にすぎる弱い立場の人々、苦学生等の心、姿を自分に置き換え想像し、自分のなし得る努力でもって相手の想い、夢に寄り添っていく岸の想像力、実行力は常人では難しい。

小泉八雲の遺品蒐集、記念館建設、床几山運動場建設等も郷土の文化、スポーツの脆弱さを思いやり、向上を願うのも強い郷土愛の現れであ。

4. 国際人「ドクトル・キシ」と絆・人脈

日本の法曹界を代表する人であり、国際弁護士、IOC 委員として日本は勿論、世界の多くの人から、認められ尊敬、信頼された岸。国際社会では「ドクトル・キシ」の尊称で呼ばれるようになっていた。

ひとつ例を挙げると、第9回オリンピック アムステルダム大会（昭和3年）の米国の選手団長は第二次世界大戦連合軍の司令官であり、戦後はGHQ司令官のダグラス・マッカーサーであった。マッカーサーは岸に次回オリンピック ロサンゼルス大会は、欧州から遠隔地のため参加国、選手が少ないのではないかと予測し、日本の団長だった岸に「ぜひ、日本の多くの選手をロスに送ってくれ」と要請した。これに岸は応えてロスアンゼルス大会に 200 名の選手団を送り、競泳種目など好成績をあげ、大会を盛り上げ成功に導いた。

米国の選手団長であったブランデー氏は、この日本の対応に深く感銘すると共に、岸が大会の一夜に開いた晩餐会の席上「大会は欧米のみにか限ることなく、五大州全部で開催すべきである。日本はアジアで唯一の開催資格を持っている国である」との訴えに強く共感し、その勇気と決断力を称え

た。以後岸との親交を温めていった。

岸はロスアンゼルス大会の翌年亡くなり、はしたものの昭和15年の東京オリンピック招致に成功したが、結果として「幻の東京オリンピック」となった。

戦後、日本が国際社会に復帰した昭和27年、第15回オリンピック・ヘルシンキ大会への日本役員派遣へのパスポート等の便宜を図ってくれたのは、GHQ司令官マッカーサーであった。

復興の中で昭和39年の東京オリンピック招致運動を展開し、成功した。その陰には、IOCブランデー会長の働きが大きかった。東京オリンピック開催前、岸清一銅像除幕式に忙しい中、出席し、岸との再会を果たし「東京オリンピックの開催は岸の偉業である」と述べ、岸の働きを大いに称賛した。



昭和39年9月30日 岸清一博士銅像復元
除幕式にて花束を手向けるブランデー会長

耐乏の中で育った岸は、世の中のためになるという志を
いただき法曹界で実現させ確固な位置を築いた。大きく育ま

れた力量は、国民の健康体力向上に尽くし、日本のオリンピックを世界と肩を並べるものにした。同時に郷里の山河、人への真心は、生涯を通じてなされた多様な社会貢献として強い郷土愛そのものである。出雲人の情味を充分に発揮した人間・岸清一先生ならではの歩みである。

岸が交流した、特に国際的に交流した人々から敬愛され、結んだ絆は昭和39年の東京開催へと実を結び、スポーツだけではなく、多くの面で形を変えより良い働きをしている。彼の業績、精神を顕彰し、学んでいくことは意義あることと考える。

逸話をひとつ：GHQ司令官ダグラス・マッカーサーは、執務室の机の引き出しに小泉八雲の著書を1冊忍ばせ愛読していた。また、彼の副官であるボナー・フェーズは知日派で八雲への造詣も深く、日本人と天皇の関係をマッカーサーに説いた。

※「参った」の意味

岸は、昭和8年10月29日、岸育英事業の1期生であった医師 加藤英市氏の治療むなしく、喘息発作から、急性心臓麻痺に陥り、最後には唯一声「参った」と言われ、逝去された。

この「参った」という一語は、これまであらゆる多くの苦難を解決し、打ち勝ってきたという自信を持ってしても、天命には勝たれないという自覚から、天命に従っていこうという「スポーツマンシップ」「フェアプレイ」の言葉であったと思う。



昭和 16 年 3 月 東京神田区駿河台
(お茶の水)に完成した岸記念体育会館



昭和 39 年 7 月 東京渋谷区神南 (代々木) に
完成した岸記念体育会館



令和元年 5 月 東京新宿区霞ヶ丘に完成した
ジャパン・スポーツ・オリンピック・スクエア